

対極にある福祉社会

前の記事でご紹介した『ショック・ドクトリン』を読んで、私自身が胸糞悪くなりました。イラクとの縁がとりわけ深かったので、今まで超大国が赤子をいたぶるような残酷な大量爆撃をこれ見よがしに行うのはなぜだろうかと不可解に思っていました。それが、銭ゲバ・ハゲタカたちが他国民の財産を正規軍の爆撃によって強奪している実態だと解説されて、耐えがたいほどの不快感に陥りました。そこで口直しに、国民全体が平等に富を分け合って豊かに暮らしているフィンランドの事例を読んで、心を慰めようと思いました。フィンランドの社会改革を紹介する典型的な本 2 冊を読んで、その感想を Amazon review に投稿しました。以下その内容を転記しますので、みなさんにも共にお口直しをしていただければと存じます。

1. 堀内都喜子『フィンランド 豊かさのメソッド』集英社新書、2008 年

★★★★★ 日本のミーイズムと対極の国 2018 年 9 月 3 日

- ・平均 25 人の学級で、先生ひとりではなく、アシスタントも張り付けて、落ちこぼれが出ないようにすべての生徒を丁寧にフォローしていく。エリート校というものはない。
 - ・教師という職業が社会的に高く評価されていて、競争が厳しい。
 - ・テストは穴埋め式や選択式というのではなく、基本的に論述式である (p. 66)。
 - ・学生に対する経済支援は厚く、成人になっても 45% が職業関連の訓練や教育を受けている (p. 93)。
 - ・税金は高いがガラス張りで、国民が納得している。
 - ・18 歳で選挙権が与えられ、同時に国会議員に立候補することもできる。中高生のころから政治に興味を持ち、政党の手伝いをする若者も多い (p. 125)。
 - ・企業内で、人間関係において上下関係があまりない (p. 125)。年齢・性別・経済状況に囚われない平等の国である (p. 196)。
- これでもかと言わんばかりに私欲を追及する「先進資本主義国」から見ると羨ましい隣人愛の国である。

2. イルッカ・タイバレ、山田眞智子訳『フィンランドを世界一に導いた 100 の社会改革』公人の友社、2008 年

★★★★★ 社会の底辺の人びとがすべてケアされる国 2018 年 9 月 6 日

アメリカや日本の社会が、強者が総取りする新自由主義経済に突き進んでいるとき、

まったく対極の社会理念を追求する国の実在そのものが感動的である。

この本は、刊行の辞を大統領が書き、筆者の中には3人の首相経験者、2人のフィンランド議会議長経験者、13人の大臣経験者を含む議会議員、その他、官僚、研究者、NPO（NGO）の代表、一般市民が執筆し、111項目にわたってこの国の社会改革の現状を紹介している。いずれの項目も、すべての国民がもれなく社会の一員として尊重されるような、手厚い福祉国家をめざし、戦後営々として一歩ずつその目標に向かってゆるぎない努力をしてきたことを紹介している。大項目を挙げると、「政治・行政」「社会改革」「保険ケア」「教育・文化」「戦争と教育のはざままで」「市民社会」「ソーシャルテクノロジー」「日常生活の喜び」とあらゆる分野にわたっている。

この国が決して平和で豊かな政治環境に恵まれてきたわけではなく、歴史的にはスウェーデンとロシアという二つの強国に挟まれて、属国扱いされたり戦争を余儀なくされたりしてきた。1940年にソ連との冬戦争が終結したとき、国土の10%を失い、その地に住んでいた44万人の主として農業に従事していたカリヤラ人を370万人の国が受け入れて、ほぼ同等の農地や生活環境を提供して定住させたということが述べられている（p.203）。沖縄や福島の悲劇にあった人たちを突き放す社会とは対極にある。その他、ホームレスへの住宅供給、傷痍軍人へのケア、少数民族ロマニ人の地位向上、貧困者への支援など、社会の底辺の人びとがもれなくケアされるように徹底した社会福祉が提供されている。

そのような一体感のある社会を作るために、約7万～8万のNPO（NGO）があり、フィンランド市民の5分の4がそのような社会活動に参加している（p.210）。労働組合の組織率が高く、ピーク時には給与労働者の80%を超えたという（1993年）（p.215）。青少年への政治参加への訓練も盛んで、青少年のための選挙演習も行われるという（p.224）。

そういう社会背景の上に、LINUXやノキアといった先端技術産業も育っていることが述べられている（p.248）。

（2018年9月6日 哲）